

A-056 「考槃」(槃しみを考して澗に在り) 『詩経』国風 衛

「い」ことしたの」

A K Y 訳

(原詩)

(読み下し文)

谷のほとりていいことしたの

考槃在澗

槃(たのしみ)を考(な)して澗(かん)に在り

あの人つたらやさしくつて…

碩人之寛

碩人(せきじん)之(こ)れ寛(かん)たり

独り寝の夢覚めて眩くあのとまきのこと

獨寐寤言

獨り寐(い)ね寤(さ)めて言う

いづもいづも「想っているわ」

永矢弗諼

永く矢(ち)かつて諼(わす)れず

山のふもとでいいことしたの

考槃在阿

槃を考して阿(あ)に在り

あの人つたらくつろいじやつて…

碩人之邁

碩人之れ邁(ひ)なり

独り寝の夢覚めて歌うあのとまきのこと

獨寐寤歌

獨り寐(い)ね寤(さ)めて歌う

いづまでも「忘れないわ」

永矢弗過

永く矢(ち)つて過ぎず

丘にのぼっていいことしたの

考槃在陸

槃を考して陸(おか)に在り

あの人まわりで私踊ったりして…

碩人之軸

碩人之れ軸(じく)たり

独り寝の夢覚めて思うあのとまきのこと

獨寐寤宿

獨り寐(い)ね寤(さ)めて宿る

「誰にもいわない」けつして…

永矢弗告

永く矢(ち)つて告げず

「このあいだ、わたし、あの人といいことしちやつたんだ……」

谷のほとりや山のみもとで。あの人つたら、とつてもやさしくつてさ。ちよつとしどけないかつこうもしたりして。

だから、二人とも盛り上がつちやつて。楽しかつたなあ。わたし、はしやいじやつて、あの人を踊りまわつたりして。

だから、毎朝目が覚めてからずつと、あのこときのこと思っているんだ……

でもね。他の人には言わないの。だって、言つたら、あの人とのこと、だめになつちやつようない気がするんだもん。」

「使われている言葉について」

● **考槃** 考は、成す。槃は、楽しみ。考槃については、白川静さんが逢引のこと、藤堂明保さんが、遊びまわることだといっているほか、考凡(降神の儀礼)とする説があり、槃には、楽器をたたいて楽しむ、隠居の楽しみ、木を組み立てて家を作ることなどとする考え方もある。わたしは、逢引説によつて若い女のその日の思い出のように解して訳した。

● 潤、谷あい。谷川。

● 碩人、優れた人。立派な徳のある人、大きい人。

● 寛、広い。ゆつたりした。可愛がる。

● 寐、寝る。

● 寤、覚める。

● 矢、誓う

● 諼、いつわる、忘れる、勿忘草

● 阿、山の曲がりめ、山あいのすそ。

● 邁、ゆるやか。寛大。白川静さんは、いくらかしどけない意味を含ませている

のだらうといっている。

● 過、過ぎたこととして忘れる。

● 陸、小高い土地、おか。

● 軸、車の軸、丸いものを中心、白川静さんはめぐるといふほどの意味だらうという。加納喜光さんは、するりと抜け

出した様子だという。

● 宿、多くの人は目が覚めてもなお臥していることとつているが、第一章、第二章

と比べ不自然。加納喜光さんは、思い

がとどまつて離れないと解している。

● 告、白川静さんは、鞠の仮借で、終わ

らない、極まりないの意だといっている。

● 多くの方は、「告げない」と文字通りに

解している。

この詩については、賢者が隠遁生活しているのに、それをうけない君主を批判する詩であるとか、隠居生活を楽しむ詩であるとか、男女の逢瀬を題材にしたものだとするものとか、いろいろな説があるようです。

いろいろ文献を読んでみましたが、かなり断定的に書いては、あるものの、その根拠を明確に記述してくれているものがなく、わたしには、どれが正しいのかは、わかりません。

ただ、原詩を素直に読んだかぎりでは、君主を批判しているようなところは、表には出ていないように思います。

また、自分が隠遁生活を楽しんでいる様子を詠んだ物とすると、自分で自分を碩人(大きな人、立派な人)つていうだらうか。もし、周りの人がその人を見て言うのなら、「永く誓つて……」つていうのもおかしい。

で、結局、ここに載せたような情景、女の子が、恋人とあつたときのことを思い出している様子をうたつたものというのが、もつとも、ぴつたりするように思えたので、そのようなイメージで訳してみました。